

作物品種名雑考 (24)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者名	吉田,雅夫
発行元	農業技術協會
巻/号	35巻10号
掲載ページ	p. 470-473
発行年月	1980年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



作物品種名雑考 (24)

—ア ン ズ その 1—

吉 田 雅 夫

1. アンズとアプリコット

菊池秋雄氏 (1948) によるとアンズの原産地はアジア東部であるという。19世紀の後半期に至るまでは、欧米の学者はアンズの原生地はアジア西部のアルメニア、アナトリア地方と考え、学名に *Prunus armeniaca* Linn. という名を付けた。しかし、これらは西紀前に中国から中央アジアにわたったものであり、そこからさらにアジア西部、ヨーロッパに広まったもので、中国こそアンズの原生地であるという。中国におけるアンズ栽培の歴史は古く、五果の一つとされている。また、「黄河の北は杏、南は梅」といわれように、アンズは北の方に多く分布しているようである。

一方、アメリカの Dr. Hough と Dr. Bailey (1975) はアフリカからヨーロッパ、アジアに分布するアンズを研究し、次の6群に分けている。1) 中央アジア、2) イラン～コーカサス、3) ヨーロッパ、4) ツンガル、5) 中国北部、6) 中国東部である。5)の中国北部には *P. sibirica* (モウコアンズ) と *P. mandshurica* (マンシュウアンズ) が含まれ、6)の中国東部には *P. ansu* (アンズ) が含まれるという。彼等は中央アジアからヨーロッパ地方にかけて分布するものを *P. armeniaca*, すなわちアプリコット (apricot), 中国東部から日本にかけて分布するものを *P. ansu*, すなわちアンズ (杏) としている。私は4年前に、New Jersey の Dr. Hough の家に2日ほどお世話になり、このことについて討論したことがある。日本では *P. armeniaca* を東アジア系とヨーロッパ系の2つに分けているが、これを別種として考えてみるといろいろ面白い点が見出される。ここでは品種文化論を述べてよいという編集者の助言をいただいたので、思いきってアンズ (*P. ansu*) とアプリコット (*P. armeniaca*) を対比させてみることにした。

さて、アンズ (杏) とアプリコット (apricot) はどう違うだろうか。私達は杏に親しんでいるせい、杏という、「春早く咲く桃色の花」、「初夏橙色に熟する比較的大きな果実」、「たべると目が覚めるほどすっぱい実」を連想されると思う。一方、欧米の人は apricot という、「春たけなわに咲く白っぽい花、初夏から真夏にかけて熟する黄緑色の比較的小さい果実」、「たべるとすっぱみもあるが甘い実」を連想するという。前者は雨にきわめて強く、後者は雨や病気にきわめて弱い。これは育

った場所の違いによるものであるが、杏=apricot と単純に考えてはいけないように思うのである。

2. アンズ品種の進化

1) 日本のアンズ 日本のアンズは、中国から渡来したものという。平安時代の本草和名 (918) と和名類聚抄 (923~930) では、杏にカラモモの和名をつけている。これをみても、アンズはかなり古い時代に中国から日本に伝来したのは確かであろう。ここでも、ウメと同じように、中国から九州、四国などへの南渡來說と中国から朝鮮を経て日本にきた北渡來說の2つがある。昔、四国や瀬戸内地方ではアンズが広く作られ、広島県の福山市は200年前まではアンズの名所だったという。また、現在日本一のアンズ産地である長野県には、愛媛県の宇和島から伝わったという説がある。現在わが国で栽培されている品種は大部分中国東部原産の *P. ansu* の系統であり、中国北部の系統はきわめて少ない。それらの理由から、私はアンズに関しては南渡來說をとりたいと考えている。

さて、菊池秋雄氏によると杏はカラモモと呼ばれていたが、最初にアンズの名称のあらわれたのは、林道春氏 (1662) の多識編 (1662) で、杏=加良毛々、俗称、安牟寸 (アムズ) という名称を使用しているという。さらに、杏子=アンズ、杏仁=アンニンという名称もかなり古い時代から使われたという。

次に、わが国におけるアンズ栽培であるが、文献では11世紀ごろ始まったという。当初は果樹としてより、観賞用、薬用として重んじられた。特に、アンズの種子は杏仁として漢方薬に用いられたので、医薬関係の名称に“杏林”とか“杏雲”など杏の字がよく使われているのはその名残りであるという。

アンズが果樹として栽培されるようになったのは、比較的近年になってからである。長野県では松代藩の時代からさかんにアンズが植えられ、安茂里村 (現長野市) や森村 (現更埴市) などでは、今から300年ほど前に、すでにかんりの栽培がみられたという。品種についてみると、日本園芸長野支会と県農事試験場の主催で、大正2~4年と14年の2回、優良品種調査会が開催され、在来品種の中から多数の品種が選抜された。さらに、農事試験場果樹試験地 (箱清水) では大正10年から15年にかけて内外から多数の品種を収集して、今日各地で栽培さ

れている数多くの品種を選択している。

次に、北陸地方から東北地方もアンズの栽培は古く、園芸試験場東北支場では後藤知貞氏が中心になって昭和13年から17年にかけて、秋田、岩手、青森などから約60品種を収集して、優良品種を選抜している。

一方、明治初年には、欧米から18品種、中国から1品種が導入され、試作試験が行われたことが、三田育種場の舶来果樹要覧に記されている。興津の園芸試験場に導入された品種をみると、大正元年から12年までに10品種の記載がある。他の果樹に比べればきわめて少ないといえるだろう。これらのアンズ品種は、近縁のウメ (*P. mume*) や日本スモモ (*P. salicina*) と交雑して種間雑種を生じたり、東洋のアンズと西洋のアプリコットが交雑して、今日までに多数の品種が育成されてきた。

2) **欧米のアンズ** 中央アジア及び西アジアで改良されたアンズはヨーロッパに伝わり、そこでさらに改良が加えられていった。菊池氏によると、伝播の経路は中国→ペルシア→アルメニア→ギリシャ(1世紀)→ローマであり、イギリスにはイタリアから1524年に、アメリカにはスペインから18世紀に伝わったという。また、apricotという言葉は、praecox(早熟生果実)→a praecox→apraecox→apricox→apricock→apricotの順に変化してできたという。

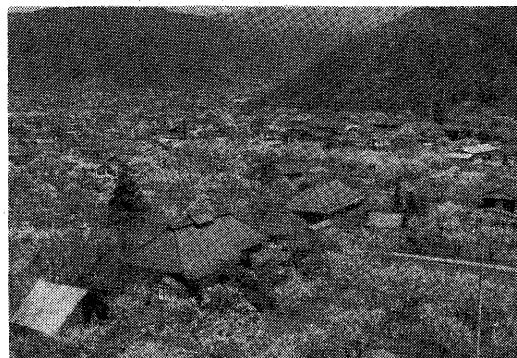
いずれも乾燥地で改良されたために、乾燥に強いが雨や病気にはきわめて弱い。しかも、ウメ (*P. mume*) や日本のアンズ (*P. ansu*) などと交雑する機会がほとんどなく、比較的純粋な *P. armeniaca* が育成されたものと思う。近年になって、東洋のアンズ品種との交雑により、耐寒性や耐病性のあるものが育成されつつある。

3. アンズの里“信濃”

1) **善光寺の鐘の音** 信濃の国、長野県はアンズの産地として有名で、今ではアンズの花が咲くころになると“アンズ列車”が出るほどである。長野市善光寺の境内には「善光寺 鐘のうなりや 花一里」という芭蕉の句をきざんだ石碑があるが、長野郊外の安茂里(あもり)村は徳川時代からアンズの名所としてよく知られていた。今でも“善光寺の鐘の音が聞こえるところはアンズがよく育つが、聞こえないところは育たない”といわれるほど善光寺を中心とした地域はアンズがたくさん作られていたのであろう。

また、善光寺からは少し離れるが、最も古い産地として知られる更埴市森、倉科などのアンズは今から300年前、松代藩主の夫人が伊予の国、宇和島藩から嫁入りの際、アンズの苗を2本もって来て、城内に植え付けたのが始まりという。今でも100年を越す古木が数多くみ

られるので、今冬、長野県果樹試験場の協力を得て、果樹試の京谷氏と小松氏にアンズの里を訪ねてもらい、貴重な品種を多数収集してもらった。



第1図 アンズの里—更埴市森

ここでは古くから選抜された品種を紹介するとともに新しく収集して来た品種を紹介することにしよう。

2) **明治以前のアンズ品種** 大正2~4年及び14年の2回にわたって優良品種調査会が、日本園芸長野支会と県農事試験場の主催によって開催され、その結果、第1回には鏡台丸、平和、のどくぐり、晩蜜柑、甚兵杏、清水など、第2回には昇進堂、明月丸、黄金の露、錦紅丸、古大丸、甚四郎、作造モモ、さやか丸、幸大杏、城山号、中丸などを優良品種として選抜した。

鏡台丸(きょうだいまる): 更埴市森の久保氏が自園から選抜したものといわれる。

平和(へいわ): 更埴市森の南沢氏が自園実生杏から選出したものである。平和という名称は第一次世界大戦の平和記念にちなみ、時の郡長(氏名不明)が命名したものと伝えられている。

甚四郎(じんしろう): 須坂市南小河原の松倉氏が、在来種中から選抜したものである。

その他の品種は来歴がよく分らないので省略する。

次に、本年1月京谷氏が収集した品種を紹介する。

新平和(しんへいわ): 更埴市森東岡森の近藤早苗氏の宅内にあり、樹齢は100年くらいという。

白もも: 同上近藤早苗氏宅にある。果肉が白いのが特徴である。

昇進堂(しょうしんどう): 更埴市森東岡森の近藤因信氏の宅内にある。加工すると香気があって品質がよいという。昇進堂は長野にある老舗の名称である。

万上(まんじょう): 更埴市森東岡森の柚山最澄氏の宅内にある。6月下旬ごろ熟す古木である。

みかんもも: 更埴市森東岡森の近藤早苗氏の宅内にある。糖度高く甘ずっぱい。みかんのような味があるので

この名が付いた。

さやか丸：更埴市森西清水堂に自生している。

のどくぐり：更埴市森西岡森の南沢小太郎氏の宅内にある。のどくぐりと同じ品種と思われる。

アメリカ杏：同上，南沢氏の宅内にある。藤原銀次郎氏がアメリカから持帰った米国杏と同じかどうか，確認していない。

シナモモ：同上，南沢氏の宅内にある。スモモとの雑種と思われる。中国から来た仁杏に似ている。

北島白もも：更埴市森岡地の北島忠直氏園にある。白肉で，白っぽい地色にピンクの着色がみられる。果実は細長い。

豆アンズ：更埴市森岡地の北島千里氏園にある。果肉がごく薄く，果実が小さいのでこの名称がついた。

さわやか丸：更埴市森南清水堂の島田昭雄氏宅内にある。甘く，生果でも干果でもおいしい。大正時代に天皇陛下に献上されたという。

佐竹丸（さたけまる）：更埴市森貫の木の西村竹茂氏園で採集した。所有者は同森新田の西村竹茂氏である。在来のものとしては品質が良く，干果に適している。

渡航丸（とこうまる）：更埴市森北清水堂の島田佐人氏宅にある。現地では，とっこう，とっこうまる，とこう，とこうまると呼んでいる。隣家の人がブラジルに渡ったころ発見したのでこう命名された。樹齢100～120年生くらい。干シアンズによい。

金鈴（きんれい）：同上の島田氏宅にある。缶詰にすると色がよいという。

佐土丸（さどまる）：長野市安茂里の佐土勲氏園にある。果実は丸く小さい。丸加工用。樹齢は100年近い大木である。園主の名から命名された。

その他，この時に採取したものに，**轟まんじゅう**と**高野まんじゅう**がある。いずれも果実は細長い形をしている。まんじゅうは形から来たものと思われる。

3) **大正・昭和のアンズ品種** 長野県農事試験場果樹試験地が大正10年長野市箱清水に設置されて以来，埴科郡森村の杏試験地でも試験が続けられていた。大正15年に，県内の優良品種に加えて県外，さらには海外からも品種を収集して，特性を調査した。この時収集したものは45品種で，その主なものを示すと，秋田大実，晩生大実，広島小杏，広島大杏，平和，甚四郎，餅杏，宮坂，新潟大実，鏡台丸，置賜，清水号，早生大実，麦黄準杏，山形1号，山形2号，山形3号，白杏，仁杏，李小杏，李二杏，アレキサンダー，ブレンハイム，ニューキャッスルアーリー，チルトン，ムアパーク，アーリーオレンジなどがある。その中で優良と認められたものを示

すと次のようである。

新潟大実（にいがたおおみ）：新潟原産で果実が大きいのでこう名付けた。

早生大実（わせおおみ）：秋田県原産，熟期が早生で大実なのでこう命名した。

山形3号（やまがたさんごう）：山形県原産で，大正15年に果樹試験地に導入されたものの一つである。山形県からは置賜（おきたま）のほか三つの不詳品種が導入され，品種名が不明のため，山形1号，山形2号，山形3号と仮称名が付けられた。

宮坂（みやさか）：北海道原産で寒さに強い。名称の由来は不明である。

甲州大実（こうしゅうおおみ）：山梨県勝沼町の若尾氏が発見した品種である。甲州から来た大実の品種というのでこう命名された。

仁杏（じんきょう，にあんず）：俗称スモモアンズ。果樹試験地が大正15年に中国から導入した品種群の一つである。スモモとアンズの自然交雑種と思われる。スモモに似ているのでこの名称が付けられたと思う。

その後も長野県では優良品種の選抜及び改良が行われ，これまでに次のような品種が育成，選抜されている。

昭和（しょうわ）：更埴市森の西村氏が昭和15年ごろ自園のアンズの中から選抜し，命名したものである。

東亜（とうあ）：別名 中条1号（なかじょういちごう）。更埴市の中条一二三氏が育成した品種である。

さつき：更埴市森の北島忠直氏の育成によるもので，近ごろ注目されている品種である。

信州大実（しんしゅうおおみ）：長野県果樹試験場で育成された品種。新潟大実にアーリーオレンジを支配，系統番号はE-39，昭和51年命名発表された。信州で育成された生食兼加工の大実品種なので，こう命名された。

信山丸（しんざんまる）：同じく果樹試で育成された品種。山形3号の自殖実生，系統番号はK-57である。昭和51年命名された。丸アンズシラップ漬けに適する。

4. みちのくのアンズ

東北地方にもアンズの古木が多く，特に青森県津軽地方に多くみられるという。園芸試験場東北支場の後藤知貞氏は，昭和13年より秋田，岩手，青森などから63品種を収集し，昭和17年に次のような優良品種を発表している。青森県原産のものとして，石川大実杏，大浦白杏，城杏，丸杏一名新里杏，高瀬杏，白子杏，岩手県原産のものとして綾織杏を選抜している。その他，比較的優良なものとして，島杏，川部杏，船沢杏，阿部杏，小笠原杏，野呂杏，堀越杏，蔵館杏を選んでいる。以上の品種には品種名がなかったので，園芸試験場で，主として産

地の町村名を採って、仮称品種名にしたという。

5. 中国から来た杏

杏は中国において最も古い栽培沿革を有する果樹といわれている。紀元前に栽培の記録がみられるし、5～6世紀には赤杏、黄杏、李杏、文杏などの品種名がみられる。菊池氏(1948)によると、大果の品種だけとりあげてみても、河北省には黄魁杏、水晶杏、銀白杏、麦黄杏、山東省には巴達杏、扁杏、水杏、銀杏、大紅杏、李子杏、晚甜杏、山西省には毛杏、老爺杏、江蘇省には荷包杏、巴豆杏、梅杏、満州には大杏梅、銀白杏、桃杏などがあるという。

中国人は杏の花を觀賞し、果肉を生食、加工に利用するほかに、仁を食用と薬用に供した。蛭田正氏(1936)は関東州における在来杏の品種を研究し、仁の苦味によって杏を2つの群に分けている。仁に苦味のない甘仁種を真杏群、仁が苦い苦仁種を非真杏群としている。同氏は、真杏群に属するものとして、大杏梅(Ta hsing mei)、大真杏(Ta chên hsing)、長真杏(Chang chên hsing)、小真杏(Hsiao chên hsing)をあげている。一方、非真杏群に属するものとして、大山後杏(Ta shan hou hsing)、石河杏(Shih ho hsing)、麦黄杏(Mai huang hsing)、荷包杏(Ho pao hsing)、青皮爛杏(Ching pi lan hsing)、李杏(Li hsing)、刺杏(Tzu hsing)をあげている。

これらの品種のほか、わが国に導入されたものを示すと白杏、香白杏、李子杏、李二杏、仁杏、大杏梅、麦黄準杏、梅桃杏、黄杏、金州大杏などがある。

6. 欧米から来た Apricot

明治の初め欧米から三田育種場に導入されたものは18品種である。それには、ブレダ(米)、ボウジー(仏)、ベルドトルウズ(仏)、カニノグロウス(伊→仏)、アーリーゴールドデン(米)、アーリー・ムーアパーク(仏)、ジャミュセ(仏)、ジュウエ(仏)、ラージアリー(仏→米)、リアボウ(仏)、ムーアパーク(英→米)、ピーチ(伊→米)、ペリシュブレコースドウラン(仏)、レッドマスキュリン(米)、シプレー(仏)、シントアンブロイス(米)、トリヨンフドルシル(仏)、ヴィヤール(仏)がある。

大正年代、興津の園芸試験場に導入されたものは9品種で、アレキサンダー、アレキシス、シュクレドオロブ、ブレコースドプールボン、ヘンブスカーク、ホランド、ムーアパーク、ロアイヤール、ブレンハイムである。

大正から昭和にかけて長野県に導入されたものには、アーリーオレンジ、ビッグハンガリアン、ムーアパーク、ニューキャッスルアーリー、チルトン、ウイソク

デリシャスなどがある。

戦後にはアメリカから多数の品種が導入されたが、主要なものを示すと、Alfred, Blenril, Curtis, Earliril, Farmingdale, Franciscan, Goldcot, NY477, Phelps, Rival, SunGlo, Valnur, Wenatchee などである。

また、トルコからは岸本修氏が次のような品種を持帰っている。Choloulu, Hajihaliloulu, Hasanbay, Shekerpaare, Tokaloulu がそれである。これらは小果で甘い、雨にきわめて弱く、ひどい裂果を生じた。

これらの品種の中で雨に比較的強かったのは Blenheim, Goldcot, New Castle Early, Rival であった。

7. アンズとアプリコットの結婚

さて、これからのアンズ品種を育成するにはどうしたらよいだろうか。アメリカでは雨や寒さに強い遺伝子を要望しているし、日本では、生食と加工の両用に適した品種を育成したいと考えている。そこで、私達は、アンズとアプリコットを国際結婚させることにした。日本からは雨に強いアンズの花粉を送り、アメリカからは生食に適したアプリコットの花粉を送って来た。こうして私達は今、アンズとアプリコットの混血児を養成しているところである。

既存品種の中に、アンズとアプリコットの雑種と思われるものを拾い上げてみると、信州大実、清水号、Goldcot, Rival などがみられる。これらは生果でも甘くておいしいし、加工にしても食べやすい性質をもっている。たくさんの雑種を育成すれば、もっと栽培しやすく、たべやすいものが得られるだろうと期待している。

8. おわりに

つい先日、上野の国立科学博物館で北京原人展を見た。中国は多くの動植物や人類の発祥の地といわれているが、これらの出土品をみて、なるほどと思った。あらためて中国の歴史の深さを知った次第である。アンズも中国が生まれ故郷とすると、その歴史はかなり古いものに違いない。古墳などの遺跡からアンズの核がよく出土するのをみても、アンズは人類の歴史とともにあるといえてよい。世界に多数の人種がいるように、長い間にはいろんな種類のアンズが生まれても不思議ではない。

ここでは、わが国に導入された品種、わが国で生まれ育った品種を中心に、杏と apricot を対比して私見を述べてみたが、品種改良を進める上では、両者を別種と考える必要はないと思う。これらはお互いに容易に交雑し、子孫ができ、しかも、これらの混血児達は健康で、将来ホームラン王になるかもしれないからである。

(よしだまさお 果樹試験場育種部育種第3研究室長)